

横浜・・・駐留軍の接收で遅れた復興を経て大都市へ飛躍

江戸時代末期の黒船到来とともにわが国最初の開港場となった横浜は、関東大震災による大きな被害を乗り越え、近代都市へ発展してきました。太平洋戦争中は、東京に近く、京浜工業地帯の一角にあり、重要港湾の横浜港を中心に交通の要衝であったことから、連合国軍による激しい攻撃にさらされました。延べ 25 回に及ぶ空襲で、市街地は焦土と化しガレキの山で覆われました。終戦直後には「連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)」が横浜税関ビルにおかれ、占領の拠点となりました。司令部が東京に移転した後も、横浜港大栈橋をはじめとした港湾施設や市内各所の公共施設などの接收が続きました。その面積は 1,200 ヘクタール（横浜市資料による。“戦災復興誌”では約 473 万坪＝1,560ha）にもおよび、横浜経済を支えていた基盤が失われたことで、これが復興を遅らせる素因になったといわれています。その後返還が進みましたが、「鶴見貯油施設」など 5 か所の米軍施設が市内に残っています。

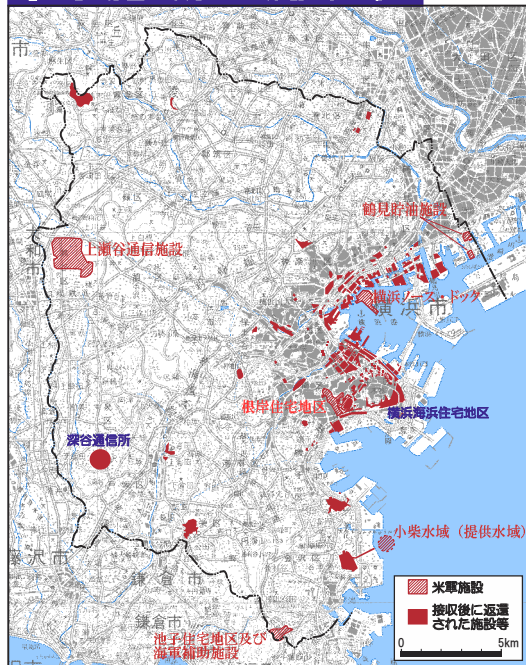
現在の横浜市は、「みなとみらい地区」など海岸部の埋め立てによる都市基盤整備とともに、市内北西部の多摩丘陵地帯をはじめとして、交通の便の良い立地条件を生かした東京都心のベッドタウンとしての開発も進み、日本の市町村の中では最多の人口 370 万人を有する大都市に発展しています。

全国主要都市戦災概況図 附図 45 横浜

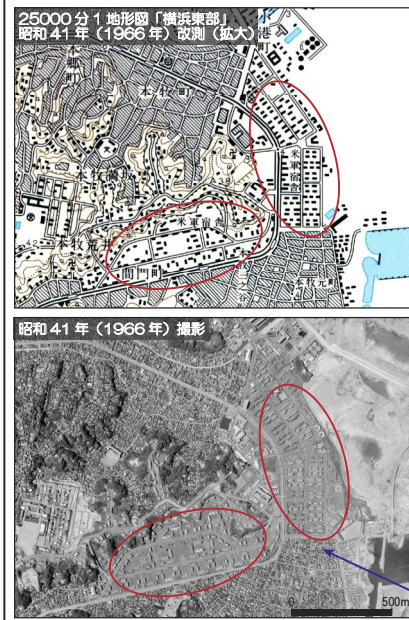


昭和 20 年 12 月 第一復員省作成 (国立公文書館所蔵)

米軍施設区域位置図



返還前の横浜海浜住宅地区



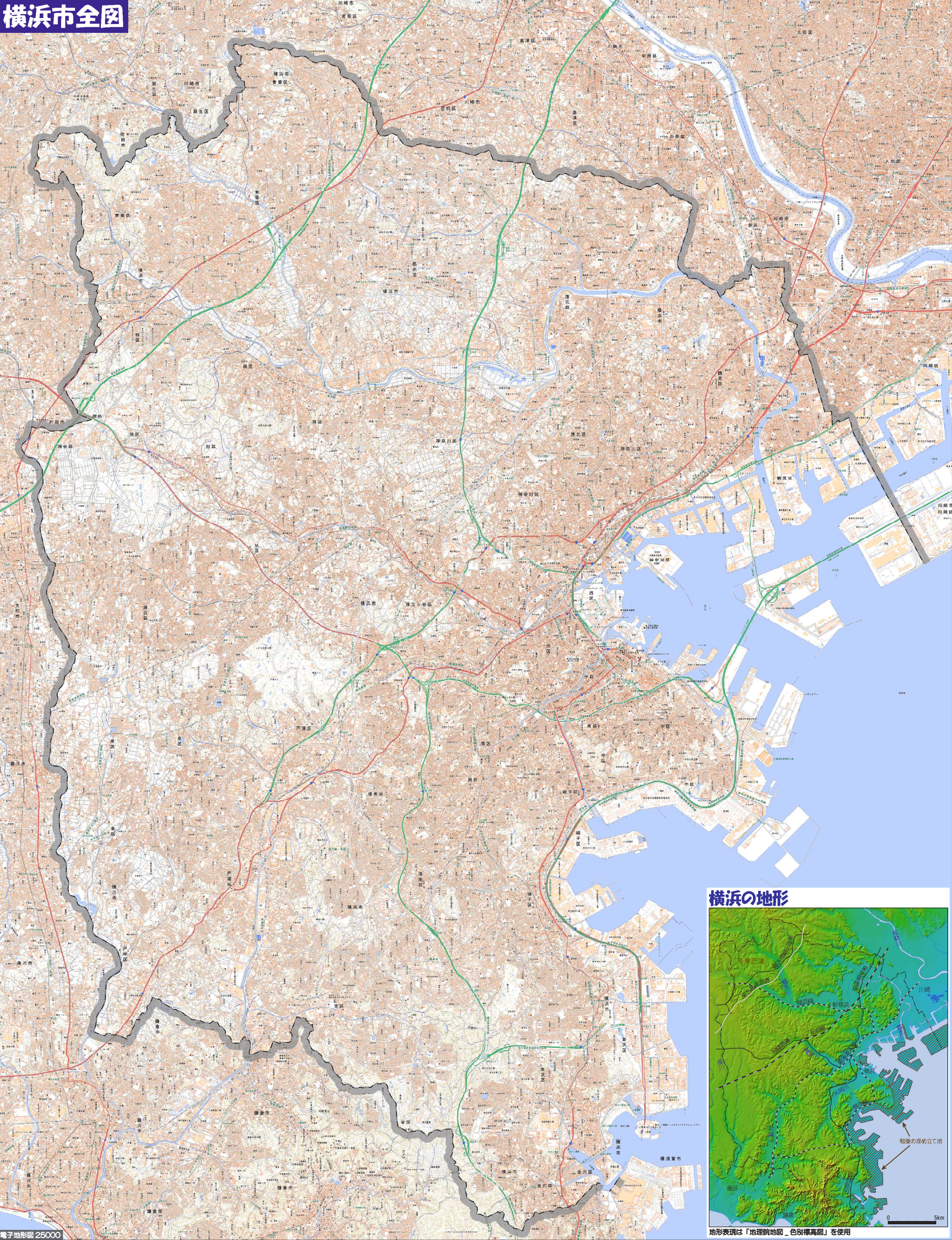
深谷通信所（米軍深谷通信隊）用地等の返還

横浜市泉区にある深谷通信所(約 77 万平方メートル)は、平成 26 年(2014 年) 6 月 30 日、返還されました。



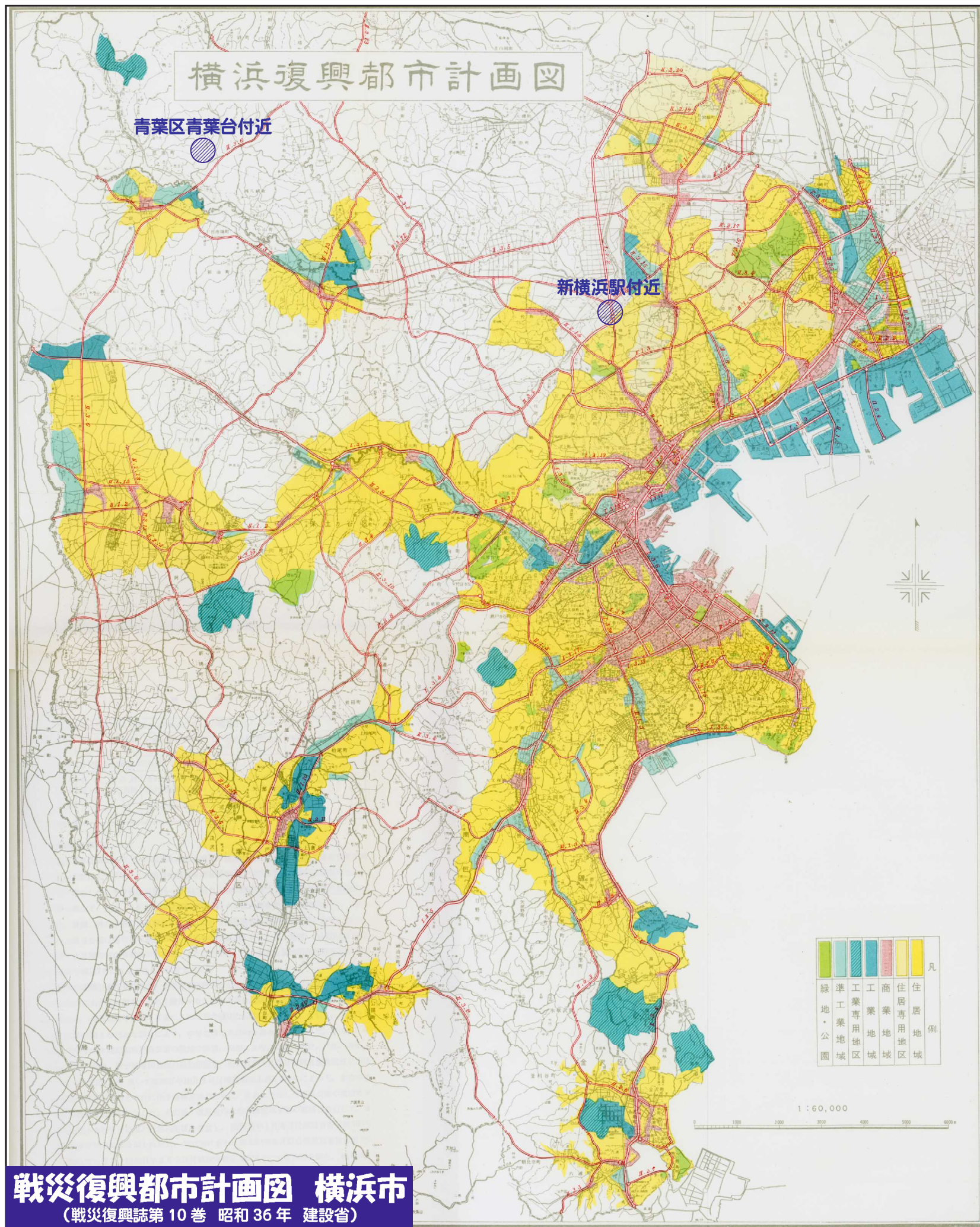
およそ 50 年前の米軍宿舎が立ち並ぶ中区本牧町付近の写真です。この地域は昭和 57 年(1982 年) 3 月に返還されました。

横浜市全図



横浜市は、昭和 14 年（1939 年）に鎌倉郡戸塚町など周辺町村を編入し、現在の市域がほぼ確定しました。その後、海岸部の埋め立てや、市内行政区の移動（区の配置分合）、政令都市に指定（昭和 31 年、1956 年）などがありましたが、周辺市町との合併はなく現在に至っています。市の面積は 437.57 平方キロメートル（平成 25 年 10 月 1 日 国土地理院）で、神奈川県全体のおおよそ 5 分の 1 を占めています。

市域の大部分は丘陵地が占め、鶴見川、帷子川、大岡川などの流域に低地が広がっています。海岸部は戦後、埋め立てが急速に進められました。

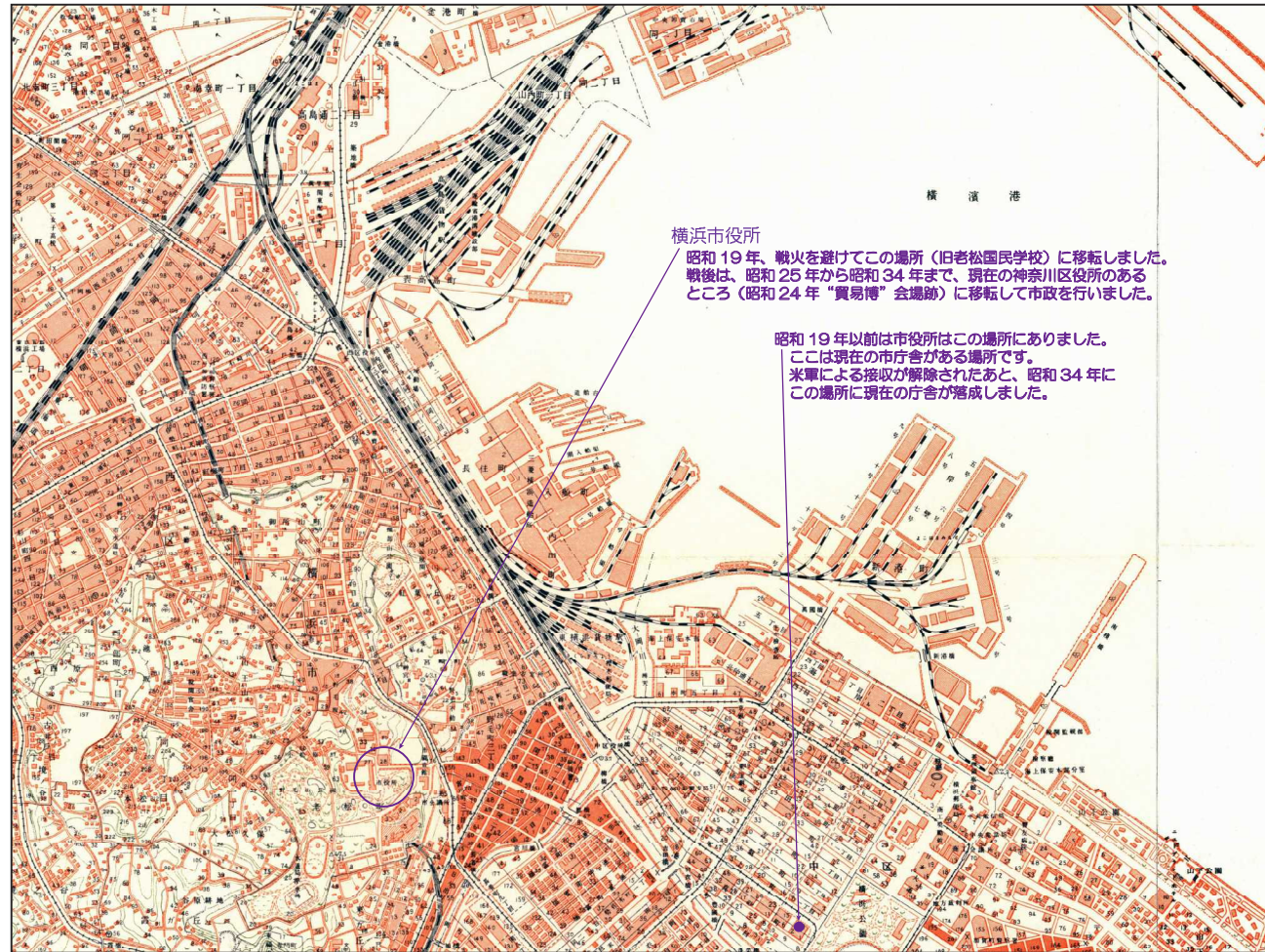


横浜の都市化は郊外にも急速に進んでいます。戦災復興都市計画で描いた事業区画の外側の丘陵地はニュータウン開発で住宅が軒を連ね、もともと田園地帯であった新横浜駅周辺は新横浜都心と呼ばれ、横浜アリーナ・横浜国際総合競技場といった大規模なイベント会場やホテル・オフィスの高層ビルが立ち並んでいます。

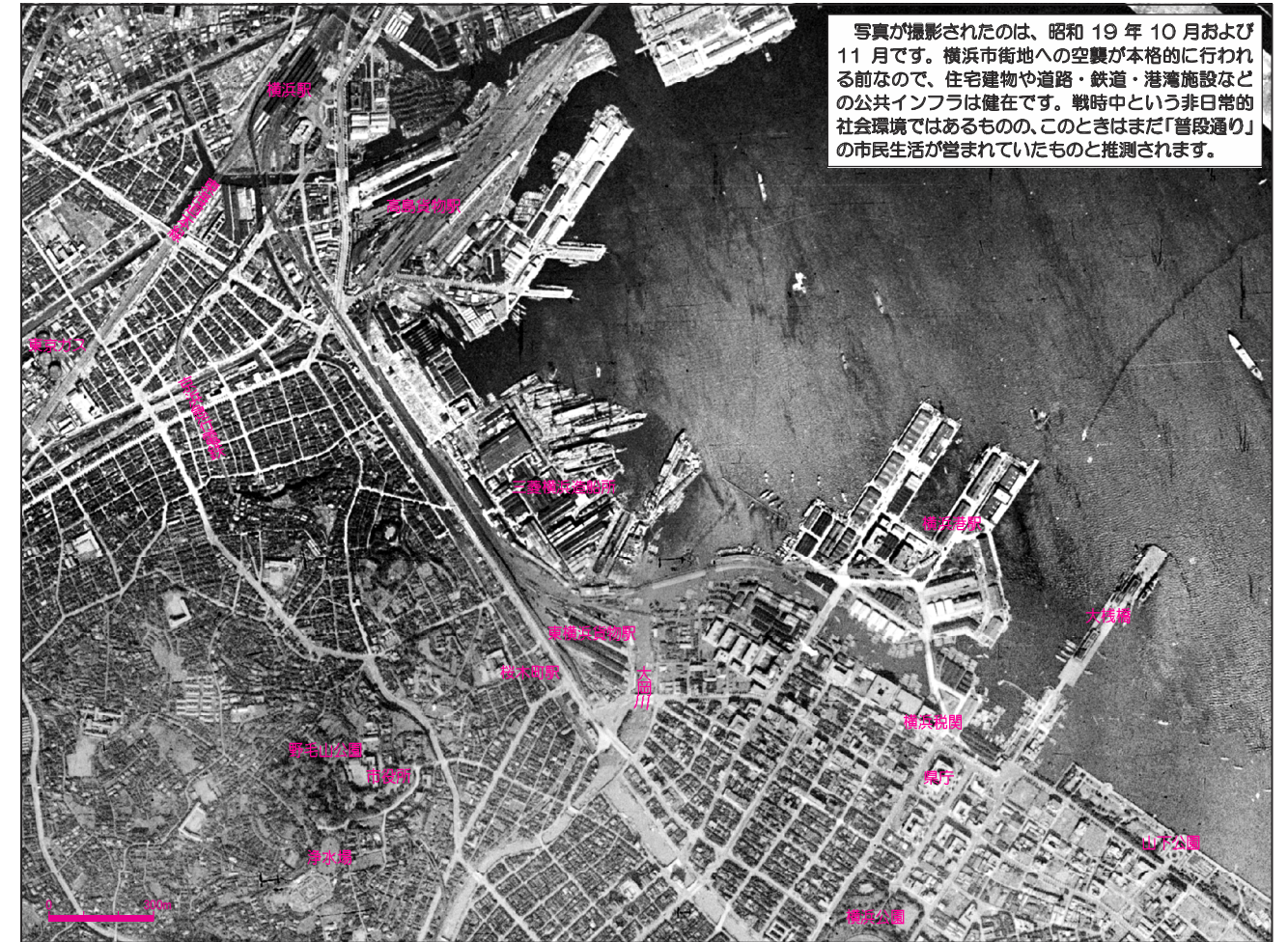


横浜中心部の終戦前後と今を地図と写真で比べてみる

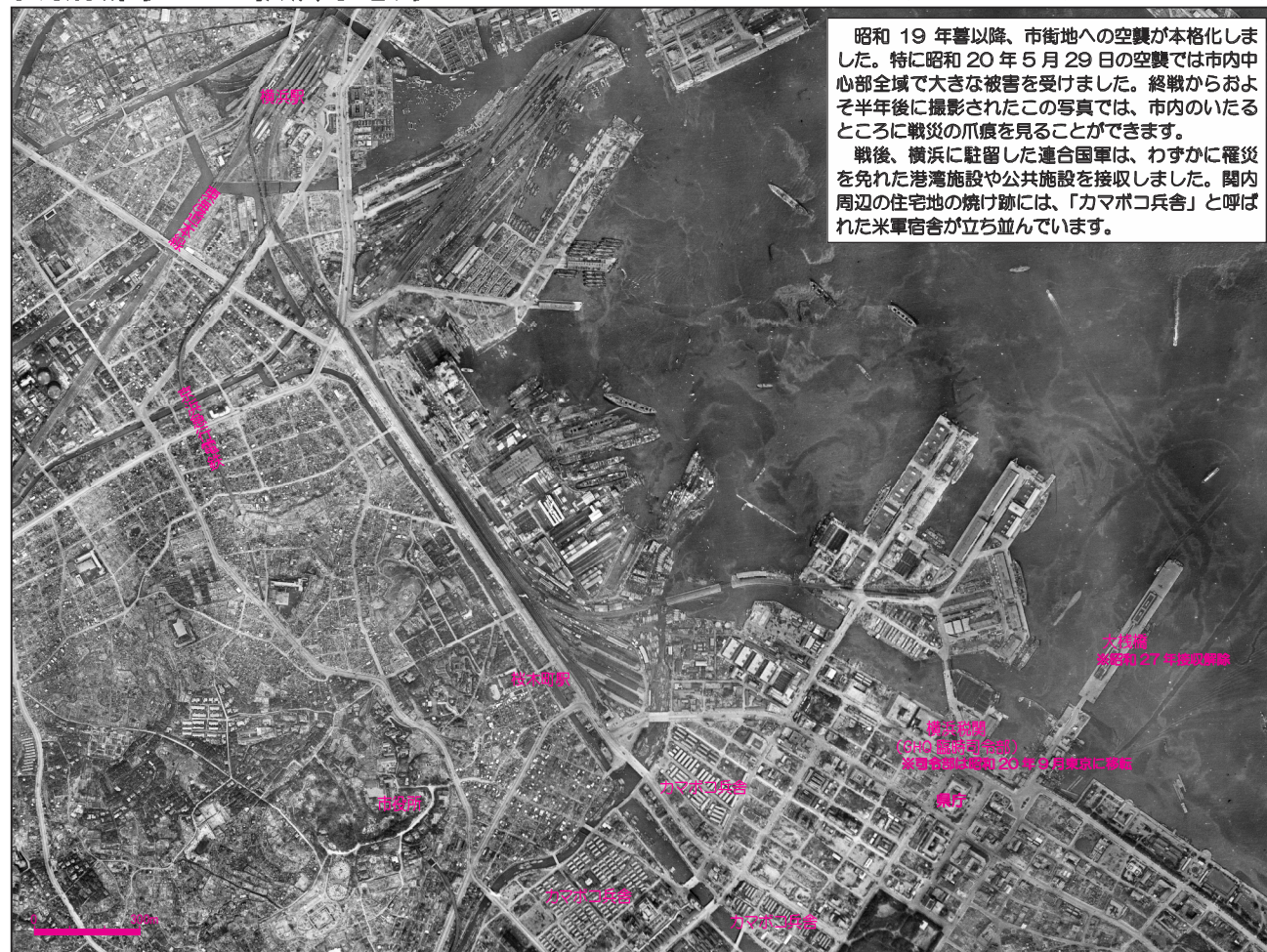
昭和 23 年（1948 年）修正 1 万分 1 地形図 （1/6000 に拡大）



空襲が本格化する前の横浜中心部 （昭和 19 年（1944 年） 陸軍撮影）



終戦後間もない横浜中心部 （昭和 21 年（1946 年） 米軍撮影）



現在の横浜中心部 （平成 19 年（2007 年） 国土地理院撮影）

